

「第4回 家族で道徳」《生徒意見》

令和2年5月20日(水)

資料：「祖母のメール」

出典：日本道徳学会近畿支部資料

“祖母の左手をそっと両手で包み込んだ” 僕はこの時、どんなことを考えていただろう。

僕は、謝りたい気持ちと、祖母がメールを打っている姿を思いうかべて考えていたと思っあ。僕はおばあちゃんにメールをあるためとらてケータイをからてもらったけど、それ以上に友達にメールで会話したい気持ちの方が上だったから最初は「からてもらったし、僕も心配だし」という思いで、おばあちゃんにメールを送っていたけど、考えたらあるのが面倒になり、予約メールを使うようになった。おばあちゃんのメールの内容もおぼろげだった。このとき、僕は、や、てる、り、を、し、て、け、げ、い、い、と、こ、の、こ、に、何、を、思、っ、て、い、ら、な、い、と、思、っ、ま、あ。また、おばあちゃんは、途、中、か、ら、の、メ、ー、ル、の、内、容、が、同、じ、と、い、う、こ、に、思、っ、て、い、た、と、思、っ、ま、あ。でも、メ、ー、ル、を、送、り、あ、う、の、か、う、と、し、て、毎、晩、7、時、か、1、日、の、1、番、の、楽、し、み、た、ら、と、思、っ、ま、あ。

最後、祖母は怒、て、お、か、し、な、い、の、に、い、つ、も、の、う、に、や、さ、し、い、笑、顔、を、見、せ、て、く、ら、た、と、き、お、ば、あ、ち、ゃ、ん、は、僕、の、た、め、に、一、生、懸、命、メ、ー、ル、を、送、っ、て、く、ら、た、ら、と、思、っ、ま、あ。自分、は、中、途、半、端、な、気、持、つ、で、メ、ー、ル、を、か、ま、し、て、い、た、こ、に、な、さ、け、な、く、感、じ、た、と、思、っ、ま、あ。お、ば、あ、ち、ゃ、ん、の、や、さ、し、さ、と、あ、た、た、か、で、改、め、て、感、じ、た、と、思、っ、ま、あ。

“祖母の左手をそっと両手で包み込んだ” 僕はこの時、どんなことを考えていただろう。

文字は消しても消えないものがある」と書いてあるように、「僕は自分がおばあちゃんのメールをしっかりと読み返したときに自分の返信に何の責任も持たずに送ったことをずっと後悔しているのだと思います。そして、同じ文字だとそれは自分の本心ではない、毎日違う内容で心を込めたというところが分かって言葉といえるのだと思います。だから、僕が送っていたのはただの文字であ、り、別、に、それ、は、僕、で、は、く、も、い、い、も、の、と、思、っ、ま、あ。私、が、こ、れ、を、読、ん、で、思、っ、た、の、は、今、の、時、代、は、ネ、ッ、ト、で、そ、う、や、て、文、字、が、飛、び、交、り、と、か、た、く、と、ん、あ、る、け、ど、それ、が、その、人、の、気、持、つ、の、か、ど、う、か、は、分、か、ら、な、い、と、思、っ、ま、あ。だから、見、極、め、な、い、け、れ、ば、い、い、な、い、お、ば、あ、ち、ゃ、ん、の、う、に、思、っ、や、り、の、心、が、伝、わ、る、よ、う、な、言、葉、で、お、れ、は、相、手、の、顔、が、見、え、て、く、ら、た、ら、と、思、っ、ま、あ。家族、や、友、人、な、ど、矢、り、な、い、困、っ、て、い、る、人、で、あ、る、も、自、分、の、心、の、内、を、い、い、伝、え、る、こ、が、で、き、る、と、思、っ、ま、あ。私、も、言、葉、に、責、任、を、持、っ、て、相、手、が、ど、う、受、け、と、め、る、か、考、え、な、か、ら、発、信、す、る、よ、う、に、し、て、い、ま、す。

「第4回 家族で道徳」《生徒意見》

令和2年5月20日(水)

資料：「祖母のメール」

出典：日本道徳学会近畿支部資料

“祖母の左手をそっと両手で包み込んだ” 僕はこの時、どんなことを考えていただろう。

その時「ごめんなさい」という気持ちで、いはば「だっ」と思っています。話を聞き掛けたのは自分なのに、自分の勝手な都合、それも面倒くささからという理由で毎日、毎日同じ内容の文を送り、「ごめんなさい」という気持ちで、だっと思っています。僕は、誰にもメール、LINEなどはしていません。正直面倒くささからです。母は、おばあさんが離れているため、毎日欠かすことなく電話をしています。僕もたまにその電話をすることもありますが、とても楽しいです。この健吾は、決して悪気はないかもしれないけど、祖母への気持ちが少ないように思いました。だから直接話すとか、文字、文字気持ちをこめることなどが大切になってくると思います。僕も気づけたこと、思っています。

“祖母の左手をそっと両手で包み込んだ” 僕はこの時、どんなことを考えていただろう。

やはり後悔の念が一番強いと思います。「僕」にとって祖母とのメールというのはケタイを買ったための口実で、たいてい重要なことでもないと思っていただろうと思います。対して祖母にとっての「僕」とのメールというのは孫との唯一のコミュニケーションの場であり、孫を心配する気持ちの表れでお互いに、とても重要度の差があったんだと思います。この話の出来事というのはこの意識の差から生まれたのだと思います。そして「僕」がおばあちゃん側の気持ちをよく考えられていたことが、この主要因の一つなんだと思います。それと途中の「僕の言葉が「この日、来か」と思っていた定例のメールが…」という所があるから、この部分からも「僕」にとってのおばあちゃんからのメールに対しての意識が読み取れると思います。